文化の発信基地に

日立　日高朋子さん

人生第2幕

創作人形を常設展示

赤ん坊を抱く母親や風にスカートがなびく女性など多彩な表情の人形がたたずむ日立市久慈町にあるギャラリー&カフェ「アトリエトモドール」。同市在住で創作人形作家の日高朋子さん(62)が「作品を見てもらえる場が欲しい」と長年温めていた夢を実現し、2月に開いた。「これからがスタート。利益追求ではなく、文化発信基地にしたい」とアトリエとカフェを併せ持つギャラリーオーナーの道を踏み出した。

日高さんは山口県出身。大学2年生の時に見た人形展に刺激を受け、独学で創作を始めた。作家歴は約40年に及ぶ。25歳で結婚。夫の仕事で知り合いのいない日立市に移住した。その頃から日立で文化を発信する場所を求めていた。茨城大学教授で彫刻家の故山崎猛さんに師事。大学院の講義を聴講するなど基礎を学んだ。

日高さんは木を芯に木の粉で肉付けし、和紙や油絵の具など表面の仕上げを変える独自の技法を用いて人形を制作する。「抽象的な風や光、音を女性で具象化している。東日本大震災を経験し、祈りがテーマに加わった」と柔らかな色合いの、しなやかで気品のある女性像を作り出す。

県内外で個展を開いてきたが、いつも個展を終えるたびに「期間が短い。自分の作品を展示する場所が欲しい」と感じていた。特に60歳の時に開いた個展では「この空間を壊したくない」という思いが高まった。「人形を求めてくれる人がいたから作り続けることができた。アーティストとアーティストを育てる人、両者の接点となる場所が日立に欲しい。体力、気力を考えると今しかできない」と一念発起。昨年は水戸市と東京、山口県のギャラリーで毎年のように開催してきた個展を休み、建築家と物件探しに市内を奔走。街中の閉店したレストランを改装し、オープンにこぎ着けた。

ギャラリーには人形が美しく見えるように位置や照明にこだわり、作品20点を展示。「気軽に来て、質の高い時間を過ごしてほしい」とコーヒーやハーブティーを出すカフェを設けた。

オープンしたばかりの今は「地固めの時期」。自らの制作時間を確保しつつ「アーティストを紹介する文化の発信基地にしたい」と準備を進める。「作品を見てくれる地域の人との化学反応が楽しみ。目指すのは双方向」と未来予想図を描く。

ギャラリーのアトリエで制作中の同市在住の画家、高鳥達明さんは「光にあふれ、明るい雰囲気のすてきな空間。作品を発表する場が増えるのはいいこと」と歓迎する。里帰り中の長女が手伝うなど家族も応援する。日高さんは「地縁や血縁もない土地で、人形を通しての出会いが一番の財産。ご縁を大事にしたい」と充実の表情を見せた。

アトリエトモドールは日立市久慈町7の2の20。不定休。営業日などはメールtomodol1026363@gmail.comか写真共有アプリ「インスタグラム」で問い合わせる。

(佐野香織)

(随時掲載)

念願のギャラリー&カフェ「アトリエトモドール」をオープンした創作人形作家の日高朋子さん＝日立市久慈町